



国体本会場に参加

五日とされ、さらに 月二十三日から二 り、明治六年からは あったのが改暦に 用から十五 日まで 用しも昔は八月十 正二年より九月二

わたって行われるよ

うになった。 四日の二日に

れたと伝えられる。 行うよう署より申し渡さ から大いに活発な祭りを を鼓舞するに良いことだ 入れるに、地域住民の士気 でもないとして自粛を申 総代が警察に祭りさわぎ から、戦時中、当時の氏子 い勇壮な祭りであること この祭りは他に比類な

保年間にすでに祭礼のしきたりや組織が出 行事も十社まいりや浜での大漁祈願、汐ふ このように勇壮豪快

天保十二年とあることから、約一八〇年前の天

ていた。このことは大井区の瀧内神社に祭りの大原はだか祭りは、古く江戸時代から行われ

祭りの由来

風景を描いた絵馬があり、その絵馬が文久四年

一八六四年) に奉納されたことや別の絵馬に

あがっていたことがうかがわれる。

機に、全国的にその名を轟 皇后両陛下の御前での な海づくり大会での天皇 光を浴びその後、全国豊か 国民体育大会の本会場へ 露、全国スポーツ・レクリ られていなかったが、千葉 エーション祭への出場を 出場して以来、にわかに脚 ず、近隣の町村の人以外知 祭りであるにもかかわら

く、この祭りは住民

いった娯楽も

の年一回最大の楽し

地域においてはこれ きた。江戸時代の当 み、大別れ式と華や

かなものが行われて

みとして受け継

が



度を整えたといわれる。

かりれば、なにを質

てきた。古老の言を

に入れても祭りの仕

花両地区の神輿もそれぞれ地区の行事後大原 法楽施行、午後一時頃大原漁港へ向う。東海・浪 漁港へ集結。十八社がそろ 日二十三日午前八時三十分に大原地区の神輿 十社は親神(おやがみ)である鹿島神社に参集、 現在の行事は、昔のもの って五穀豊穣大漁祈 と少し異なるが、初

> は、午後五時頃に木戸泉酒造前に全部の神輿が さまは勇壮豪快の一語につきる。汐ふみ行事後 ころの一つで、怒涛の中で神輿が数社もみあう みあって大原小学校校庭へ向う。 にうつる。この汐ふみは、この祭りの三大みど 願ののち午後二時三十分頃から汐ふみの行事 打ちそろったのち、二社が並列で唄い踊り、も

商店街は祭り一

り一色に塗りつぶされ、見どころその二の場面 商店街通り約一キロは人と神輿に埋まり、祭

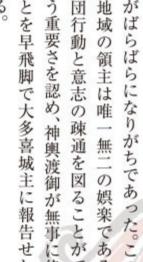
る。この大別れ式は午 見どころ三つ目の祭り絵巻がくりひろげられ は大原小学校校庭が神輿、氏子、観衆で埋まり、 うってかわった風情といえる。この大別れ式で そい、哀調おびた別れをおしむ唄「若けもんど ともに、神輿を高々とささげ、二社三社とより ともすころ、花火が秋の夜空をいろどる合図と けとめ、なげあげるころ、祭はクライマックス 終わり神輿を何度となく、高々となげあげ、う は、あたかも戦国絵巻の感で絢爛豪華な模様と も別れがつらい の状態を迎える。そして各神輿の提灯に灯りを く、力のかぎり、校庭内をかけめぐる。このさま 校庭に入った神輿は、さながら神輿の競争の如 い」と歌うさまは、さきほどまでの荒々しさと いえる。やがて、夕暮ともなると各神輿はかけ さらに、夕方午後六時頃になって大原小学校 会うて別れがなけりゃよ

みあう。 まま各地区へ帰るのを れぞれの神輿は、その 後七時頃に終わり、そ 十時頃まで商店街でも こばむかのように午後

中それぞれ地区の行事 翌二十四日は、午前

この日は大別れ式後来年の祭りまで、しばし神 後、午後五時頃、木戸泉酒造前に打ちそろい、以 輿との別れをおしむ若衆が遅くまで神輿をも 後二十三日とおなじ様子で大別れ式にのぞむ。 んだあと、甚句や木遣によって宮入りとなる。





という重要さを認め、神輿渡御が無事に終わっ もちがばらばらになりがちであった。このため当時は仕事の忙しさから、とかくお互いの気 この地域の領主は唯一無二の娯楽である祭り たことを早飛脚で大多喜城主に報告せしめた が集団行動と意志の疎通を図ることができる

